有孔鍔付注口土器の正体

西　川　博　孝

1　はじめに

縄紋時代中期末葉に現れる有孔鍔付注口土器は、1976年に佐倉市江原台遺跡で初めて発見され、注目された。その理由は、孔付きの鍔と注口という中期中葉の有孔鍔付土器と後期注口土器の両方の特徴を持っていたことから、藤森栄一らが提唱した鍔付有孔土器が注口土器へ変容するとした説を裏付ける打って付けの資料として、両者の中間に位置付けられたことによる[1)]。この土器の発見と前後していわゆる有溝小把手土器や瓢箪形注口土器も発見され、鍔付有孔土器→有孔鍔付土器→（有溝小把手土器→）有孔鍔付注口土器→瓢箪形注口土器→後期注口土器という変遷は、各々の間に飛躍があるとする指摘はあるものの、ほとんど定説化した感がある。

筆者は印旛郡酒々井町飯積原山遺跡の整理から、これらと関連する資料をいくつか抽出したが、その結果上記の定説に疑義を持つに至り、学史の見直しと関係資料の再集成を行った。以下、藤森説の呪縛を離れ、中期末葉土器の小細別編年を土台として、これらの特異な土器群の変遷を再検討してみたい。なお、当該期編年は、柳澤・長山編年に依拠するものであり[2)]、その理解に誤りがあれば筆者の責任である。

2　有孔鍔付注口土器の特徴

江原台遺跡から発見された有孔鍔付注口土器（第１図１）[3)]は、①孔付きの鍔、②注口、③横向き突起[4)]、④キャリパー型深鉢、⑤微隆起線による渦巻紋様、の五つの特徴に集約される。鍔は内湾する口縁の直下に付き、孔は鍔と微隆起線による紋様が接するすぐ脇及び２個の横向き突起の片側脇にあけられ、計10孔となる。注口は鍔の直下に付き、横向き突起は注口に対して直交する位置の２か所に上下に対となって並ぶ。また、キャリパー型の器形は当該期の深鉢とほぼ同じ形態をなしているものの、微隆起線のみによる紋様は一般的な深鉢にはなく、近縁の有孔鍔付土器や有溝小把手土器と同じく地紋を欠いている。したがって、本例は①・⑤は有孔鍔付土器を踏襲した要素、②・③は瓢箪形注口土器と共通する新しい要素をそれぞれ持つことから、両者の中間に位置付けられたのであるが、④の深鉢形態は両者とは質的に異なる要素であり、客観的にみると、先学がいうこの土器が深鉢形態を取る理由付けは相当に苦しいものと言わざるを得ない[5)]。深鉢形態の採用理由をはじめ、注口、横向き突起の祖源、及び瓢箪形注口土器との関係は真剣に考える必要があろう。

深鉢形有孔鍔付注口土器の類似例を探すと、卑見による限り神奈川県新戸遺跡（第１図２）しかあげることができない。新戸例は①・④・⑤は江原台例と共通するが、②がなく大型把手の上端に注口もどきの横向き突起が付いていて、有孔鍔付注口土器とはいえない。また、有孔鍔付注口であっても千葉県キサキ遺跡例（同図４）は上半が下半より小さく、深鉢ではなく瓢箪形との中間的器形を持つ。また、多田遺跡例（同図６）は上半のみの破片でよく分からないが、口部が開き気味で後述するように瓢箪形でもやや遅れた時期のものに近い[6)]。

また、瓢箪形の有孔鍔付注口土器には同時に出土した江原台遺跡例（同図３）、飯積原山遺跡例（同図５）、東京都武蔵台遺跡例（同図７）、埼玉県白鍬遺跡例（同図８）の４例がある。江原台例は８孔、武蔵台例は４孔、白鍬例は６孔、原山例は不明であるが６孔以上と思われ、孔数がみな異なる。

このように、有孔鍔付注口土器は深鉢形、瓢箪形を含めて後出とされた瓢箪形注口土器の出土例とは比較にならないほど少なく、深鉢形は近似例があるものの厳密には江原台例１例のみであって、分類呼称を与えるレベルにない。瓢箪形も孔数がまちまちで、瓢箪形注口土器に孔を取り付けたとみるのが素直であろう。

つまり、有孔鍔付注口土器は、例外的、異端的な土器であって、有孔鍔付注口土器→瓢箪形注口土器の変遷論ははなはだ危ういものであり、全面的に再検討しなければならないと考える。

１江原台103住（千葉）Ｅ３新～３－４、２新戸（神奈川）Ｅ３新？、３江原台103住、４キサキ２住（千葉）Ｅ３－４古、５飯積原山（８）16住（千葉）Ｅ３新、６多田（千葉）、７武蔵台（東京）、８白鍬（埼玉）　Ｓ＝1/8

第１図　有孔鍔付注口土器及び近縁の土器

これらの土器の時間的位置については、江原台例は伴出土器から加曽利Ｅ３式新段階から３－４式段階となろう。新戸例は上下２段の微隆起線紋様が横位の微隆起線で連結しており、加曽利Ｅ３式新段階のいわゆる梶山類に近く、江原台例よりわずかに古いと考えられる。飯積原山例も加曽利Ｅ３式新段階が多く出土している。

以上のように、再検討に当たっては加曽利Ｅ３式新段階前後の各種土器の動向に留意しつつ、有孔鍔付注口土器の持つ前掲の各要素の系譜を検証し、その正体を見極めようと思う。

3　有孔鍔付注口土器の各要素の系譜と瓢箪形注口土器との関係

（1）有孔鍔付土器の変遷

鍔に孔が貫通する法がどのような理由で採用されるようになったのかは不明であるが、一般には鍔付有孔土器から変化したものであって、その時期は曽利Ⅱ式期とされている[7]。有孔鍔付土器が関東で現れるのは、長野・山梨とほぼ同時期で、加曽利Ｅ２式の新段階には確実に存在するようである。埼玉県西原遺跡16号住居跡例（第２図１）、群馬県中郷遺跡11区11号住居跡例（第２図５）などがこれに該当しよう。前者は体部無紋で、後者は刺突紋を地紋として太い隆線による渦巻紋を施しており、大木８ｂ式の特徴である剣先紋の退化した紋様が付随している。両例を代表として、関東の有孔鍔付土器は、体部無紋と沈線や隆線による大振りな渦巻紋を施す２種が時間幅をもって展開するらしい。第２図２～４は体部無紋系の加曽利Ｅ２式以降の例で、６～８は渦巻紋系の加曽利Ｅ２式以降の例である。後者は地紋をもつ例と持たない例があるが、やがて地紋は消失してゆく。また、両者は広口壷形の共通した器形を持ち、鍔から上の口縁は幅広で直立ないしはやや内傾している。

加曽利Ｅ３式新段階になると有孔鍔付土器は大きく変化する（同図９～11）。器形は直立、幅広の口縁がきわめて短くなって、鍔部付近は内傾ないしは内屈する。槻沢例（同図10）、上納豆内例（同図27）のように小型化も進行する。孔は体部渦巻紋様と鍔部が接する交点にあけられている。新山東例（同図14）、南三島例（同図13）、羽沢大道例（同図15）はより後出の加曽利Ｅ３－４式のものである。これらは前掲例と同じく短い口縁であるが、前代の体上部にあった最大径が体中央に下がり、器形が球形に変化する。

こうした器形変容に併せて、孔が消失する変化形Ａ（同図30・31）、孔に替わって橋状突起が付く変化形Ｂ（同図32～34）、横向き突起が付く変化形Ｃ（同図35～37）も現れる[8]。器形は球形からやや縦長の樽形である点が共通しているといえよう。これらは総じて加曽利Ｅ３－４式以降に散見されるが、南三島１・２区SK39（同図32）例は加曽利Ｅ３式中２段階が伴出していてやや古い。混在の可能性もあるが、有孔鍔付土器の器形変容とほぼ同時に変化形も現れると解することもできる。

以上のように、有孔鍔付土器と有孔鍔付注口土器は加曽利Ｅ３式新段階から３－４式期に同時に存在していたことになり、有孔鍔付土器→有孔鍔付注口土器の変遷説はこの点から破綻しているのが明白となる。

（2）有溝小把手土器の変遷

有孔鍔付土器に近い土器にいわゆる有溝小把手土器がある[9]。この種の土器も小把手がどのような事情で採用されるようになったのかは不明であるが、器形や紋様は有孔鍔付土器と同様であり、小把手と鍔にあく孔は同じ機能を持っていたことは明らかであろう。

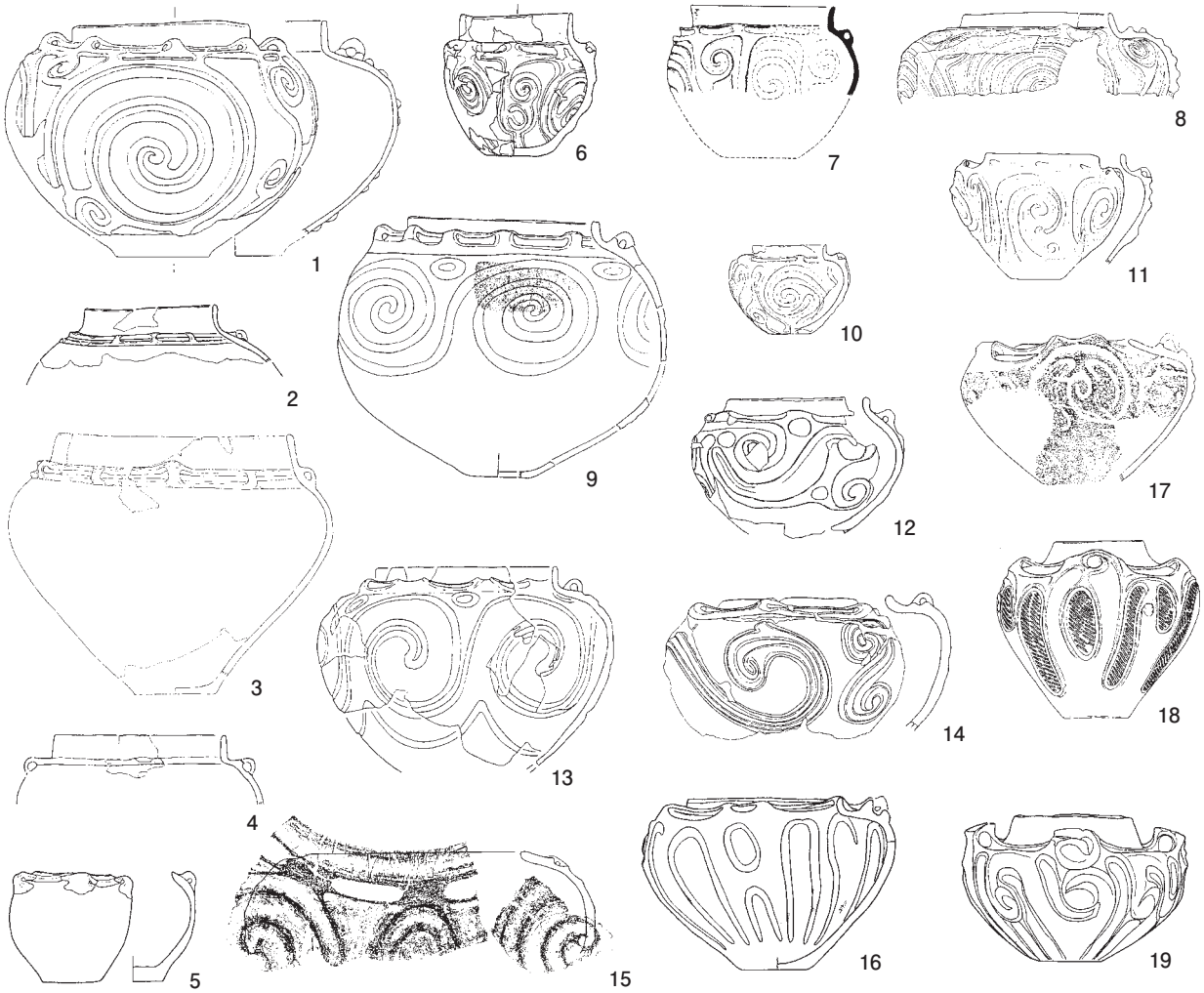
有溝小把手土器は有孔鍔付土器ほど出土例が多くないが、類例は増加してきている。当該例で最も古い確実な例は長野県花上寺遺跡例であろう（第３図１）。２本隆線による大振りな渦巻紋に小型の渦巻紋が取り付いており、前掲中郷遺跡例より１段階後出で、加曽利Ｅ２－３式段階頃であろう。有孔鍔付土器と同様、有溝小把手土器も体部渦巻紋系と無紋系の２者が時間幅を持って展開するようである。第３図２～４は体部無紋で、２は加曽利Ｅ３式古２段階、３は同３式中１段階、４は同中２段階が伴う。渦巻紋系は花上寺以後、大橋遺跡SJ21例（同図９）から大谷津遺跡Ａ13号住居跡例（同図12）・白倉Ａ区21号住居跡例（同図13）へと変遷するのが紋様及び伴出土器から検証することができる。これらはやはり同時期の有孔鍔付土器と同様、広口壷形の器形を持ち、鍔から上の口縁は幅広で直立ないしはやや内傾している。しかし、次の加曽利Ｅ３式新段階になると、武士171号土坑例（同図14）、飯積原山（71）１号住居跡例（同図15）のように口縁部は幅が狭くなったり、内傾すると同時に小把手は小型化し、横向きの長い孔になる。また、長野県郷土遺跡1104号土坑例（同図５）は加曽利Ｅ３式新段階と思われる体部無紋系のものであるが、小型化し器形も変化している。

東北にも有溝小把手土器は及んでおり、高木213号住居跡例（同図17）は器形が武士例に近い、大木９式末期の好例である。ただ、やや関東と異なる傾向を示すものもある。観音堂遺跡14号住居跡（同図18）、月崎Ａ遺跡25次119号住居跡例（同図19）は、いずれも大木９式末のものであるが、小把手は４単位となり高く立ち上がっている。

以上のように、有溝小把手土器は有孔鍔付土器ときわめて近縁の土器で、紋様、器形ともほとんど同様に変遷するものと思われる。有溝小把手土器は有孔鍔付土器が鍔に孔を移動させたのに対して、小型の橋状突起を鍔部に多数取り付けることによって同様の効果を発揮させたのであろう。

有孔鍔付土器１西原16住（埼玉）Ｅ２新、２忠生LOC.A165住（東京）Ｅ２－３、３鶴川J20住（東京）Ｅ３古、４子和清水67住（千葉）Ｅ３中、５中郷11区11住（群馬）Ｅ２－３？、６将監塚J29住（埼玉）Ｅ２－３、７有吉北（千葉）Ｅ３古～中、８坪井10住（群馬）Ｅ３中、９志久１土（埼玉）Ｅ３新、10槻沢153住（栃木）Ｅ３新、11武士10住（千葉）Ｅ３新、12南三島７区27住（茨城）Ｅ３新、13南三島６区42住Ｅ３新～３－４、14新山東８住（千葉）Ｅ３－４、15羽沢大道10住（神奈川）Ｅ３－４、16月崎Ａ（福島）大木８ａ、17連郷４集石（福島）大木８ｂ、18八景腰巻（福島）大木８ｂ、19小鍋前51土（栃木）Ｅ２－３、20・21月崎Ａ、22・23大畑（福島）大木９、24連郷（福島）大木９、25和台619土（福島）大木９新、26桑名邸10住（福島）大木９新～９－10、27上納豆内40住（福島）、28和台183住（福島）大木９新、29高木（福島）、**変化形Ａ**30米軍キャンプ座間１住（神奈川）Ｅ３－４、31多田277Ａ土（千葉）Ｅ４中、**変化形Ｂ**32南三島１・２区39土（茨城）Ｅ３中２？、33南三島１・２区1123土（茨城）Ｅ３－４、34上欠47住（栃木）Ｅ３－４、**変化形Ｃ**35寿能（埼玉）、36空沢４土（群馬）Ｅ４古、37大谷津Ａ60住（茨城）Ｅ３－４　　７・８Ｓ＝1/12、その他Ｓ＝1/8

第２図　有孔鍔付土器及び変化形



１花上寺25住（長野）Ｅ２－３～３古、２古井戸J120住（埼玉）Ｅ３古２、３槻沢156住（栃木）Ｅ３中１、４将監塚J46住（埼玉）Ｅ３中２、５郷土1104土（長野）Ｅ３新、６小比企向原（東京）228土、７今島田（千葉）、８連郷（福島）、９大橋SJ21（東京）Ｅ３古２、10千田（長野）、11高木道下39土（埼玉）、12大谷津Ａ13住（茨城）Ｅ３中２、13白倉Ａ区21住（群馬）Ｅ３中、14武士171土（千葉）Ｅ３新、15飯積原山（71）１住（千葉）Ｅ３新、16三原田１－75住付近（群馬）、17高木213住（福島）大木９新、18観音堂14住（岩手）大木９新、19月崎Ａ25次119住（福島）大木９新　　Ｓ＝1/8

第３図　有溝小把手土器

このように見てくると、有孔鍔付注口土器は有孔鍔付土器及びその変化形と同時存在しており、したがって、有孔鍔付土器から変化したとは考えられない。有孔鍔付注口土器は深鉢器形を土台として孔付きの鍔と特殊な土器としての無紋地微隆起線紋様を有孔鍔付土器から借用し、さらに加えて注口と横向き突起を取り付けた土器であると考えることができる。

では次に、有孔鍔付注口土器に取り付けられた注口と横向き突起の系譜について検討し、これらが深鉢器形と複合した経緯について考えてみよう。

（３）注口の系譜

注口土器については鈴木克彦による詳細な検討がある[10)]。氏は中期の注口土器について、関東・中部・北陸ではわずかであり、「中葉から後葉にかけて東北地方中南部の大木式土器に盛行する」とし、「鉢形系統の土器の口縁部に丸く筒形の注口部を形成して従前と全く違った形となって登場する」と端的に述べている。第４図１～３の福島県妙音寺遺跡、博毛遺跡から出土した大木８ａ式の深鉢、鉢が典型である。以後、宮後Ｂ（同図５）、中野（同図６）、田地ケ岡（同図７）例など近似の器形に受け継がれるが、大木９式以降には浅鉢や壺形、高坏、小型土器などの多くの器種に取り付けられ、大木10式へと続く（同図９～19）。これら東北地方の注口土器は関東の有孔鍔付土器などと異なって紋様は消失せず、一般の土器と全く変わらない。東北では注口土器と一般の土器との差別化は明確ではないのである。

一方、関東の注口土器について見てみると、出土例は器種・出土量ともごく少ない。深鉢では白倉例（同図20）は加曽利Ｅ３－４式段階、大谷津例（同図21）・寺野東例（同図22）はＥ４式段階であろう。また、鉢では群馬県空沢例（同図24）、埼玉県塚越向山例（同図25）は加曽利Ｅ３－４式段階で、ほとんどが東北での注口土器の多様化と連動して現れるようである。また、浅鉢では、槻沢118号住居跡例（同図26）は大木９式新段階の浅鉢そのものと思われる。そうした中にあって、神奈川県尾崎例（同図23）はいち早く注口を取り入れた事例として注意されよう。伴出土器に時間幅があるが、胴部の太い隆線による渦巻紋の特徴から加曽利Ｅ２－３式から３式古段階に相当しよう。器形は幅広の無紋口縁で体部は球形をなしており、同時期の有孔鍔付土器の器形にきわめて近い。

以上のように、関東の注口は東北出自が明らかであって、有孔鍔付注口土器及び瓢箪形注口土器といった特定の器種を除いてごく少ないことがわかる。尾崎例はその中でも祭祀的な特殊土器に注口を取り付けた関東での嚆矢かもしれない。

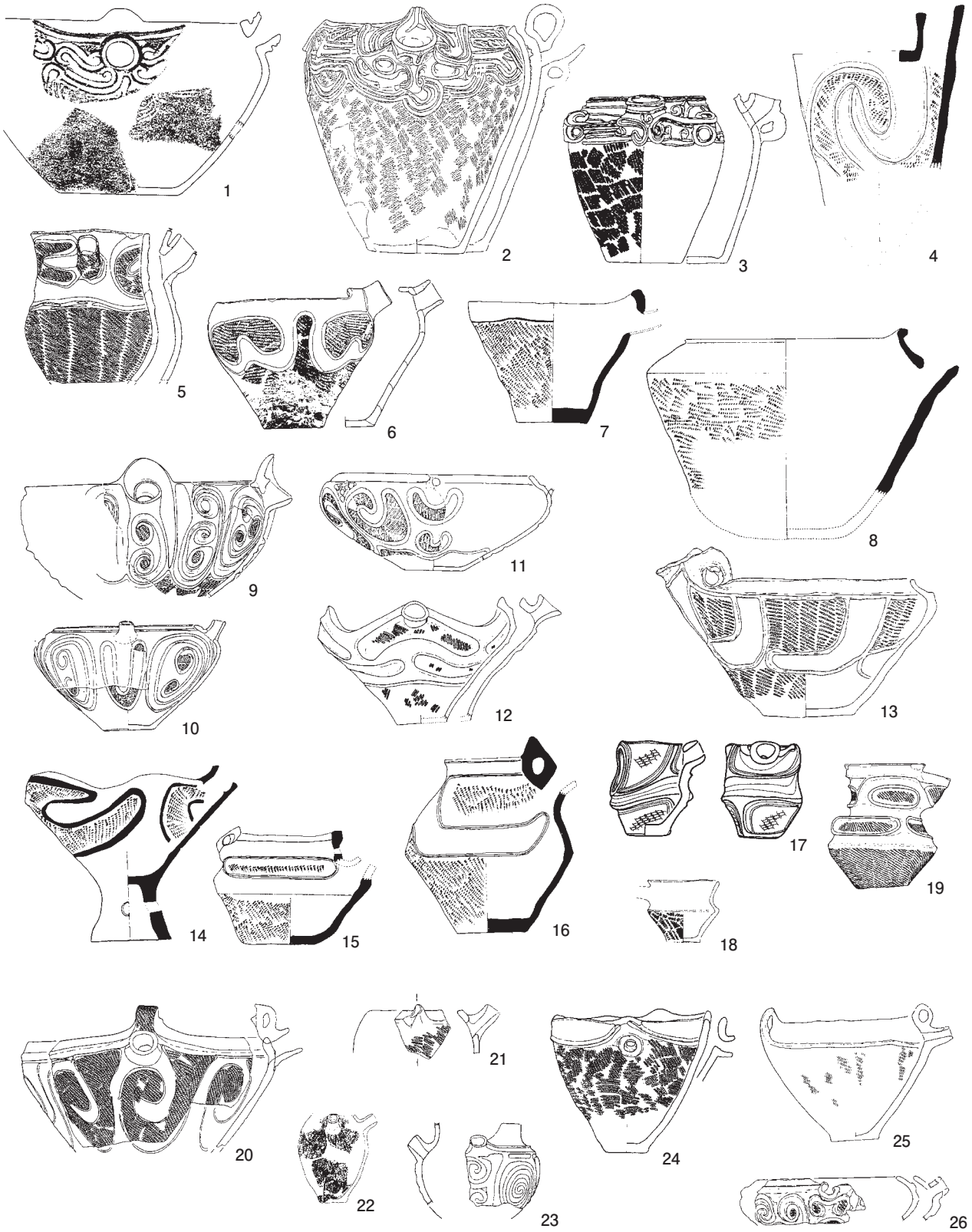
（４）横向き突起の系譜

横向き突起も東北に出自が求められよう[11]。東北では、大木８ｂ式から９式古段階の鉢形土器に見かけるようになる。岩手県十文字遺跡（第５図１）、同浜岩泉遺跡（同図２）、福島県月崎Ａ遺跡（同図５）の諸例は８ｂ式、岩手県山王山遺跡例（同図３）は９式古段階、青森県野場（５）遺跡例（同図４）も９式併行であろう。横向き突起は口縁直下の２か所に対向して取り付けられる場合と、同様にして口縁直下とその下の胴腹部に取り付けられる場合とがあるが、前者の場合でも、月崎例のように横向き突起下に隆線が２条垂下して、吊り下げ紐をリードする技法が認められ、用途に違いはないと考えられる。深鉢に取り付けられる例は時期的に遅れ、大木９式新段階以降で量的にも少ない。桑名邸遺跡例（同図６）、和台遺跡例（同図８）、野場（５）遺跡例（同図９）などが挙げられる。なお、福島県馬場前遺跡例（同図10）は異形土器で、斜めに開いた口部の両脇とその下に横向き突起が付くが、吊り下げ紐の焦げ付き痕が残っていたという[12]。

関東の横向き突起付土器は東北よりやや遅れて現れる。今のところ最も古いのは飯積原山例（同図15）で、加曽利Ｅ３式古２段階であろう[13]。他はやや降り、南三島（同図11）はＥ３式新段階、同じく（同図13）はＥ３－４式段階が伴出している。寺野東（同図14）はＥ４式新段階、上欠例は時期の絞り込みができない。これらは通常の深鉢にそのまま横向き突起が付く東北と同様の手法で、北及び東関東に分布が限られることからも、その起源は東北であることが理解できる。一方、縄紋が脱落した微隆起線紋のみの関東在地の紋様に横向き突起が付く例も寺野東に２例（同図16・17）あり、17はＥ4式新段階が伴っている。２例とも樽形の器形をなしており、時期的に古い同形の飯積原山例、あるいは先に見た有孔鍔付土器末期の変化形（第２図35・36）に近似する点は注意されよう。

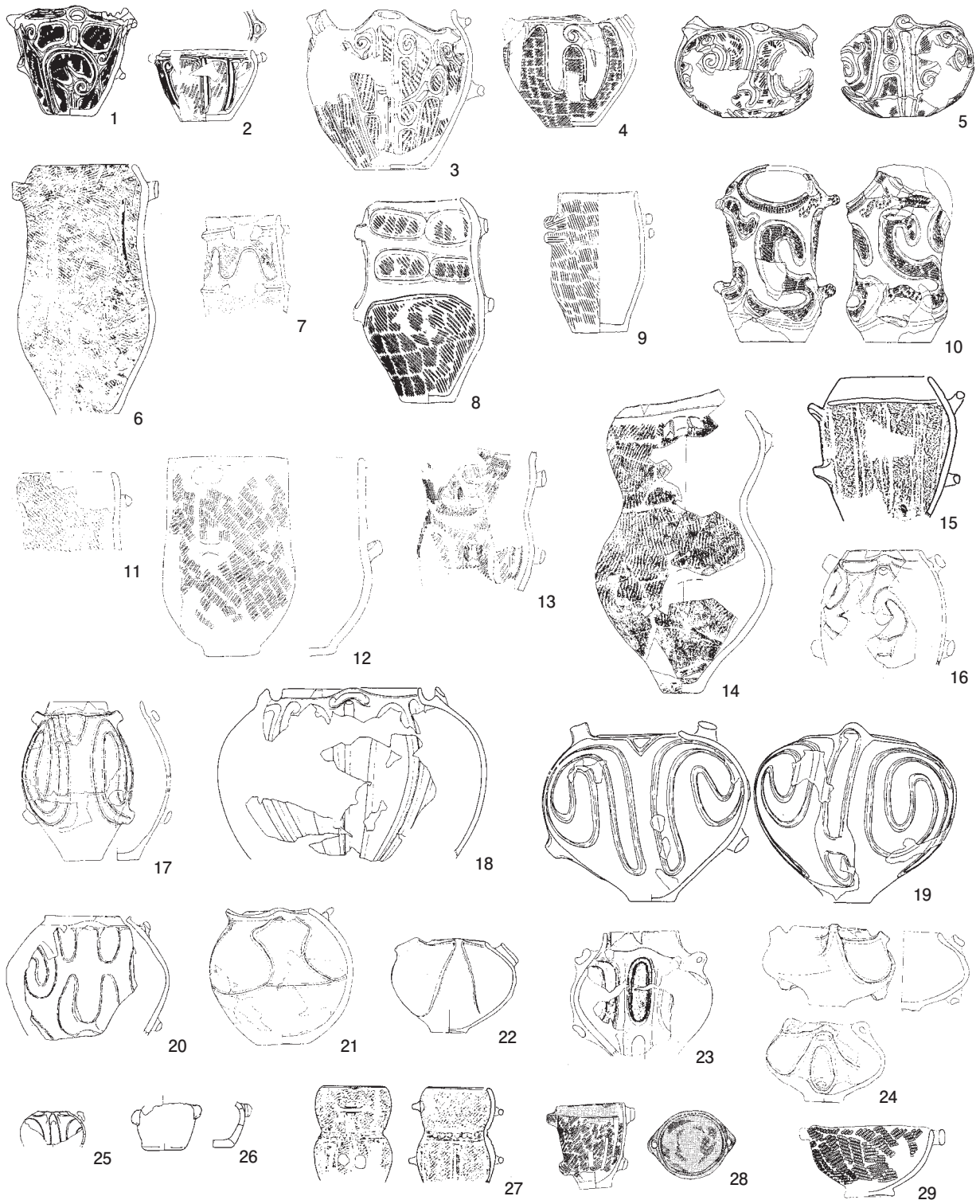
関東ではさらに深鉢以外にも横向き突起が付く。墨木戸例（同図18）や古井戸例（同図19）、寿能例（同図20）、寺野東例（同図21）は球形胴の鉢に横向き突起が付くもので、墨木戸例は古くＥ３式中２段階、古井戸例は３－４式から４式期、寺野東例は称名寺１式期に相当する。また、三反田蜆塚例（同図22）は横向き突起とともに有溝小把手土器と同じ横位方向にあく小孔が伴う。口縁直下には鍔状の微隆起線が巡り、これも先に見た有孔鍔付土器末期の変化形に器形がよく似ている（第２図13）。長野県唐沢岩陰例（同図23）、寺野東例（同図24）はさらに橋状突起が複合したもので、Ｅ４式新段階と時期が降る寺野例は球形胴が上下につぶれた器形に変化している。また、東北同様に小型土器も見られる。やはり地紋に縄紋を持つものと持たないものがある（同図25～29）。器形は様々で、飯積原山例（同図27）はＥ３式中段階と古く、くびれ部に連弧紋土器由来の点列が認められる。他は総じてＥ３－４式以降で、砂川例（同図29）は称名寺式期と思われる。

東北において横向き突起が特徴的に付くのが、鈴木克彦のいう瓜実形土器である（第６図）[14]。典型例は大木９式新段階から９－10式に多く見られ、東北一円に分布するが、今までのところその祖形は大木９式古段階までさかのぼることができる。それらは幅広無紋の口縁部を持ち、胴の張る大木８ｂ式独特の器形の土器で、好んでこの器種に横向き突起が取り付けられている（第６図１～６）。瓜実形土器はこれが変化したものと考える[15]。直立した幅広無紋の口縁部を持つもの（同図13・15～17）と持たないもの（同図８・10・11・14）があるが、時間的な差をそこに見るのは難しく、横向き突起を持つ前代の複数の器形の差、例えば前者は同図２～４、後者は同図５をそのまま継承しているように見える。大木10式段階にはさらに胴の張り



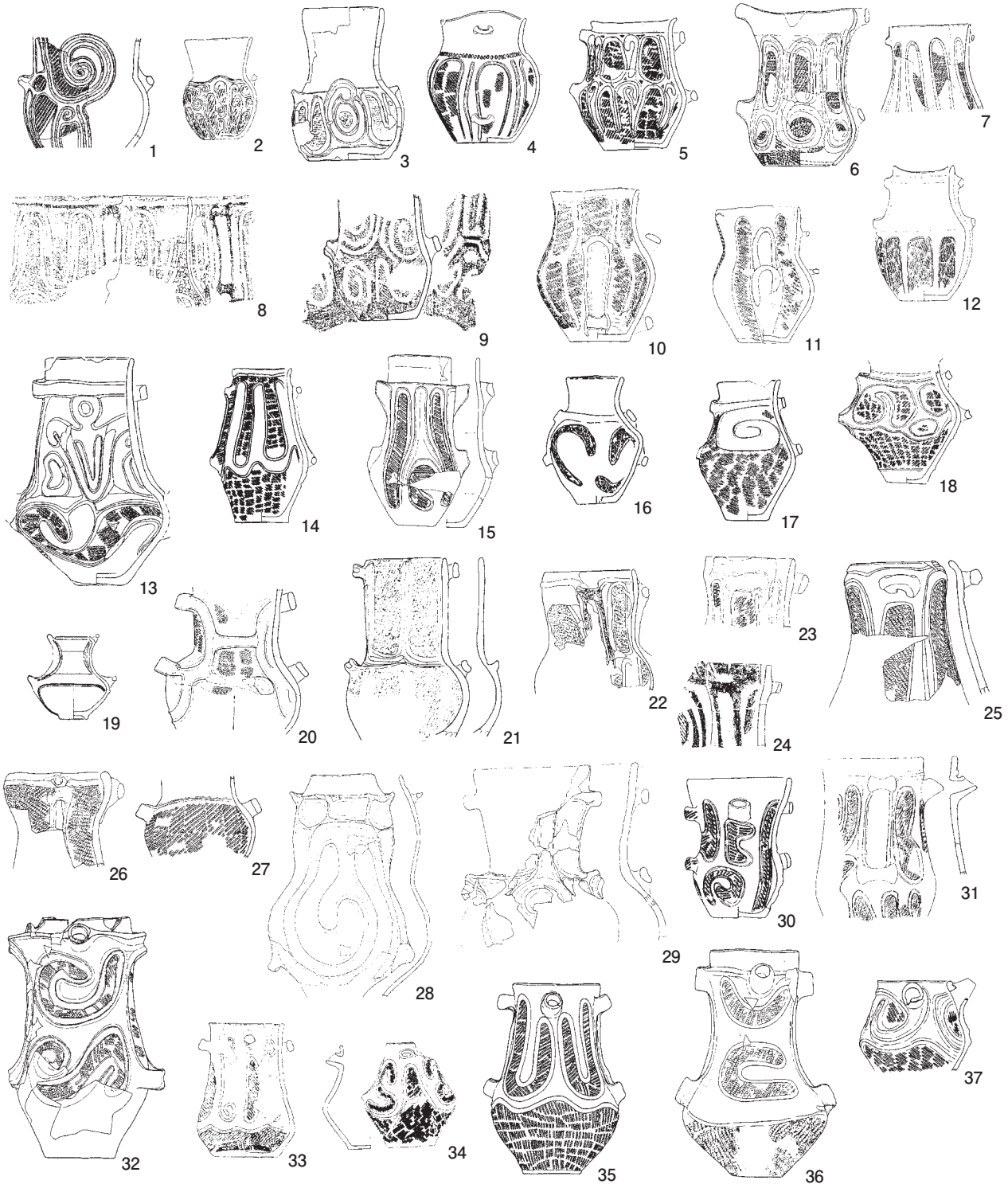
東北深鉢・鉢１妙音寺146土（福島）大木８ａ、２妙音寺187土大木８ａ、３博毛（福島）大木８ａ、４田地ケ岡（福島）大木９新、５宮後Ｂ（福島）大木９－10中、６中野（岩手）大木９－10中、７田地ケ岡（福島）大木10ａ、８田地ケ岡、**浅鉢**９大梁川（宮城）大木９中、10大梁川大木９新、11大梁川大木９－10古、12馬見塚（福島）大木９－10新、13五十瀬神社（岩手）大木10、**その他**14田地ケ岡大木９－10中、15・16田地ケ岡大木10ａ、17上野7033土（宮城）、18天戸森40住（秋田）、19貝屋Ａ（新潟）大木９－10新、**関東**20白倉Ｂ148土（群馬）Ｅ３－４、21大谷津Ａ59住（茨城）Ｅ４、22寺野東539敷住（栃木）Ｅ４中、23尾崎26住（神奈川）Ｅ２－３～３古、24空沢JH１住（群馬）Ｅ３－４、25塚越向山６住（埼玉）、26槻沢118住（栃木）Ｅ３新　　Ｓ＝1/8

第４図　注口土器



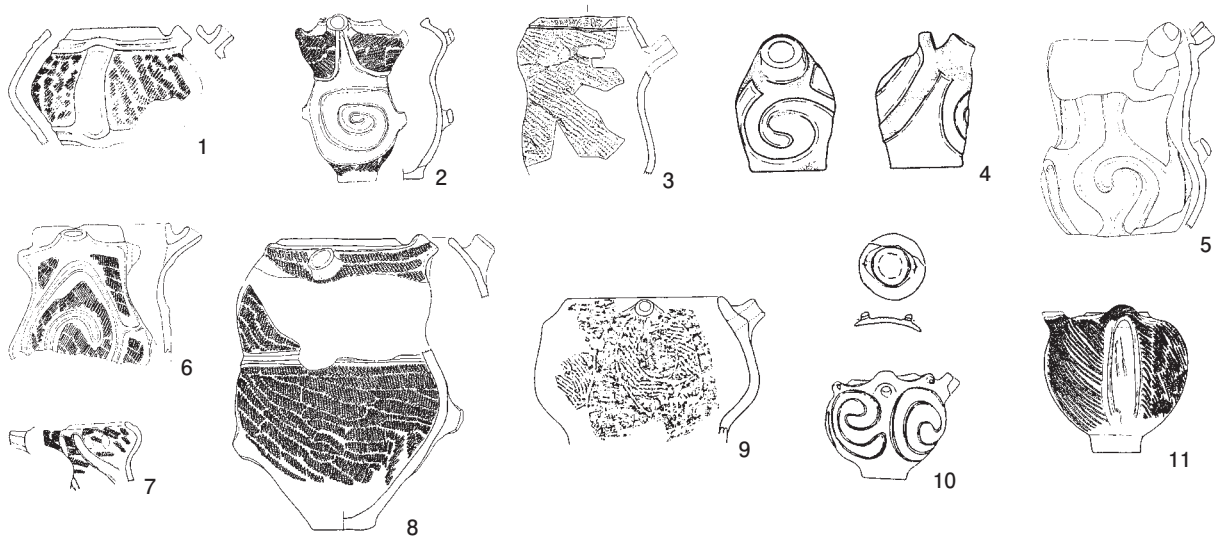
東北深鉢・鉢１十文字（岩手）大木８ｂ、２浜岩泉Ｉ７住（岩手）大木９？、３山王山RD134土（岩手）大木９古、４野場（５）19住（青森）大木９併行、５月崎Ａ22次13集石（福島）大木８ｂ、６桑名邸（福島）大木９新～９－10、７宮畑40住（福島）大木９－10、８和台22住（福島）大木９－10新、９野場（５）101住、**異形土器**10馬場前156住（福島）大木９－10中、**関東深鉢**11南三島１・２区９住（茨城）Ｅ３新、12上欠66遺構（栃木）、13南三島４区19住Ｅ３－４、14寺野東539敷住（栃木）Ｅ４中、15飯積原山（78）1062土（千葉）Ｅ３古２、16寺野東、17寺野東539敷住Ｅ４中、**球形胴鉢**18墨木戸J19住（千葉）Ｅ３中、19古井戸J73住（埼玉）Ｅ３－４～４、20寿能（埼玉）、21寺野東192土称１、22三反田蜆塚（茨城）、**橋状突起複合**23唐沢岩陰（長野）、24寺野東321土Ｅ４新、**小型土器**25羽沢大道１住（神奈川）Ｅ３－４、26羽沢大道10住Ｅ３－４、27飯積原山（78）449土 Ｅ３中１、28下佐野77土（群馬）Ｅ３－４、29砂川107土（茨城）称１　　Ｓ＝1/8

第５図　横向き突起付土器



東北１大館町RA4623住（岩手）大木９古、２山王山RA018住（岩手）大木９古、３中野33住（岩手）大木９中、４上野707住（宮城）大木９中、５小成Ⅱ37住（岩手）大木９中、６・７大梁川Ⅲ層（宮城）大木９中、８高木（福島）大木９新、９高木269住大木９新、10御所野（岩手）大木９新、11浜岩泉11住（岩手）大木９、12槻ノ木（青森）大木９併、13宮後Ｂ（福島）大木９－10新、14天戸森（秋田）大木９－10中、15下館銅屋６－16－１住（岩手）大木９－10古、16森の越（岩手）大木９－10古、17上ノ台Ａ17住（福島）大木９－10新、18天戸森17A住大木９－10新、19山田上ノ台19住（宮城）大木10、20山田上ノ台２住 大木10ａ、**関東**21飯積原山（78）1062土（千葉）Ｅ３古２、22飯積原山（８）16住Ｅ３新、23槻沢１住（栃木）Ｅ３新、24上白岩（静岡）、25武士420住（千葉）Ｅ３新、26新山東４住（千葉）、27新山台108土（千葉）Ｅ３－４、28槻沢118住（栃木）Ｅ３新、29町上（新潟）、**注口付**30和台（福島）大木９新、31和台122住 大木９新、32馬場前156住（福島）大木９－10古、33前田（福島）大木９－10中、34月崎Ａ19次55住（福島）大木９－10中、35宇輪台36住（福島）大木９－10中、36高木（福島）大木９－10中、**横向き突起なし**37和台36住大木９－10　　Ｓ＝1/8

第６図　瓜実形土器・瓜実形注口土器



東北深鉢等１上林１住（福島）大木９新、２西方前1土（福島）大木９－10、３下平石３住（福島）Ｅ４古、４和台24住（福島）、**関東深鉢**５南三島３区69住（茨城）Ｅ３－４、６上欠（栃木）Ｅ３新２、７三反田蜆塚（茨城）Ｅ３－４？、８囲護台38住（千葉）Ｅ３－４、９前原４住（東京）Ｅ４新、**球形胴小壺**10旧馬頭町（栃木）Ｅ３－４、11御城田（栃木）　Ｓ＝1/8

第７図　注口・横向き突起付土器

が強くなり、壺形状に変化するらしい（同図18～20）。

瓜実形及び近似の土器は関東及び周辺にも広がっている。多くは東北で盛行するＥ３式新段階～３－４式段階（同図22～27）であるが、飯積原山例（同図21）はその中でも古く、Ｅ３式古２段階と考えられる[13]。同図21・22例は紋様が関東的であり、同図25も口縁直下に沈線が巡り、関東で真似て製作されたものであろう。同図28・29は瓜実形の器形に地紋の縄紋がない関東的な紋様を乗せた例であるが、28は深鉢器形とみる意見もあろう。

以上のように、横向き突起は東北起源で、関東には今のところ加曽利Ｅ３式古２段階には伝わり、東北で特化した瓜実形土器を模倣した土器や深鉢に取り付けられるほか、末期の有孔鍔付土器にも取り込まれて東北以上に幅広い器種に使用されており、その点注口の受容状況とは対照的である。

瓜実形土器に注口が付くものが、福島県で集中的に出土する[16]。時期的には注口の付かない瓜実形の隆盛期と同時期で、大木９式新段階から９－10式期にほぼ限られるようである（第６図30～36）。本来、東北では横向き突起と注口は基本的に複合しないようで、大木９式新段階以前で複合する例は、卑見では十文字遺跡例（第５図１）以外に見当たらない。大木９式新段階以後では、瓜実形土器以外には同じ福島県にわずかの例があるにすぎない。下平石例（第７図３）は関東にもある器形の深鉢で、主体的に出土している加曽利Ｅ４式古段階と思われる。西方前１号土坑例（同図２）は深鉢の器形ながら注口部の付け根と対面の口縁直下に小型の橋状突起が付き、瓢箪形注口土器に近い。加曽利Ｅ３－４式段階であろう。上林例（同図１）は樽形の器形で類例を知らない。大木９式新段階から９－10式が伴う。したがって、これらは上林例を除き、関東の影響を受けて製作された、時期的にも新しいものと見ることができる。

そうすると、注口と横向き突起の複合は福島において大木９式新段階の瓜実形土器にほぼ限定して起こったと考えざるを得ない。第６図37の和台例は、瓜実形土器ではあるが、よく見ると注口のみで横向き突起がない。本例からも上記の推論の蓋然性が首肯される。

一方、関東では有孔鍔付注口土器や瓢箪形注口土器のほかにも横向き突起と注口の複合例は福島より多く見ることができる。深鉢と球形胴の小壺の２種がある。深鉢では第７図５～９の例がある。６例は加曽利Ｅ3式新２段階、５・８例は加曽利Ｅ３－４式段階、９例はＥ４式新段階であろう。７例もおそらく３－４式であろう。これらは５例を除いて縄紋地紋であり、その点では東北と同様であるが、注口と横向き突起が深鉢で共存する点は東北と異なったあり方を示す。特に６の上欠例はＥ３式新２段階と古く、福島での瓜実形土器の複合とほぼ同時である。

球形胴の壺形には第７図10・11例がある。10例は有名な栃木県旧馬頭町出土のものである。蓋付きで、注

口の付け根と対面の口縁直下には小型の橋状突起が付き、ここに紐を通して蓋を緊縛したと考えられるものである。おそらく、加曽利Ｅ３－４式であろう。11例は縄紋地紋である。両例とも、底部は瓢箪形注口土器と同様であり、瓢箪形の２段構成が１段に省略されたものとも考えられ、この形態の注口と横向き突起の複合は瓢箪形土器に求めるべきであろう。

以上のように、注口と横向き突起の同一個体での複合は、福島で関東より先行して瓜実形土器に限定的に起こったのに対し、関東ではほぼ同時期ないしはその直後に複数の器種に取り込まれたと考えられるのである。何故、東北で厳然と区別されていた注口と横向き突起の複合が福島で起こったのか、その理由は不明である。

（５） 瓢箪形注口土器の変遷

瓢箪形注口土器については多くの先学による論考があって、最新の上野論文[17]では球形を重ねた器形から下半が縦長となり、さらに上半が圧縮してゆくなどという器形変遷が示された。概ねその変遷観は了解されるが、中期末から後期初頭の編年観が筆者とはまったく異なる。改めて柳澤・長山編年で当該土器を配列してみると第８図のようになり、よりその変遷がわかりやすくなる。まず、加曽利Ｅ３－４式段階に球形を重ねた典型的な瓢箪形が各地で一斉に現れる（第８図２～９、29～31）。これらは同式土器と共伴する多くの事例がある。加曽利Ｅ４式段階になると下半が縦に伸び、上半は全体に縮小する（同図10～15・32～34）。多摩ニュータウン№671例（同図15）はＥ４式古段階が共伴する。寺野東例（同図10）はＥ４式中段階が伴う。森ノ上例（同図11）はＥ３－４式古段階とＥ４式の２時期の土器が出土するが、おそらく後者に属するものであろう。さいたまＢ53例（同図12）、多摩ニュータウン№３（同図13）例は伴出土器は不明であるが、これらと同形であるからほぼ同時期と見ることができよう。形態的な特徴としてさらに指摘できるのは、13例の口縁直下に無紋帯がある点である。11例にもわかりにくいが同様の無紋帯がある。これは加曽利Ｅ４式の口縁部微隆起帯に通ずる紋様と思われる。なお、これら諸例から見て11例は頸部が長く復元されているが、今少し短い頸部が想定されよう。羽沢大道例（同図14）は同じくＥ４式中段階が伴う。下半部はやや上下に伸び、上半部は他のＥ４式例より一層縮小している。福島の34例は器形が近似する。称名寺１式段階に伴う例は同図17～20例があげられる。17例は前段階の11例の直系と言えよう。下半部はさらに発達して上面観が方形をなし、微隆起線紋様はより複雑化して、口縁は波状となって装飾化が進んでいる。一方、19・20例は13・14例の直系で、上半の退化が進行し、下半部は下膨れがより顕著になって最大径が底部付近まで降りてきている。

以上は瓢箪形注口土器の変遷の前半期の概要で、さらに継続して同図22～26、35～37へと変遷するのであるが、紙数がないので以降は別の機会に譲りたい。ここでわかるのは、瓢箪形注口土器はまさしく瓢箪形の完成された形態でほぼ加曽利Ｅ３－４式段階に出現し、Ｅ４式段階には早くも形態変化を起こして二三の形態に分岐し、後期に入ってからもさらに形態変遷を遂げてゆくという点である。その変化の速度はきわめて速やかである。

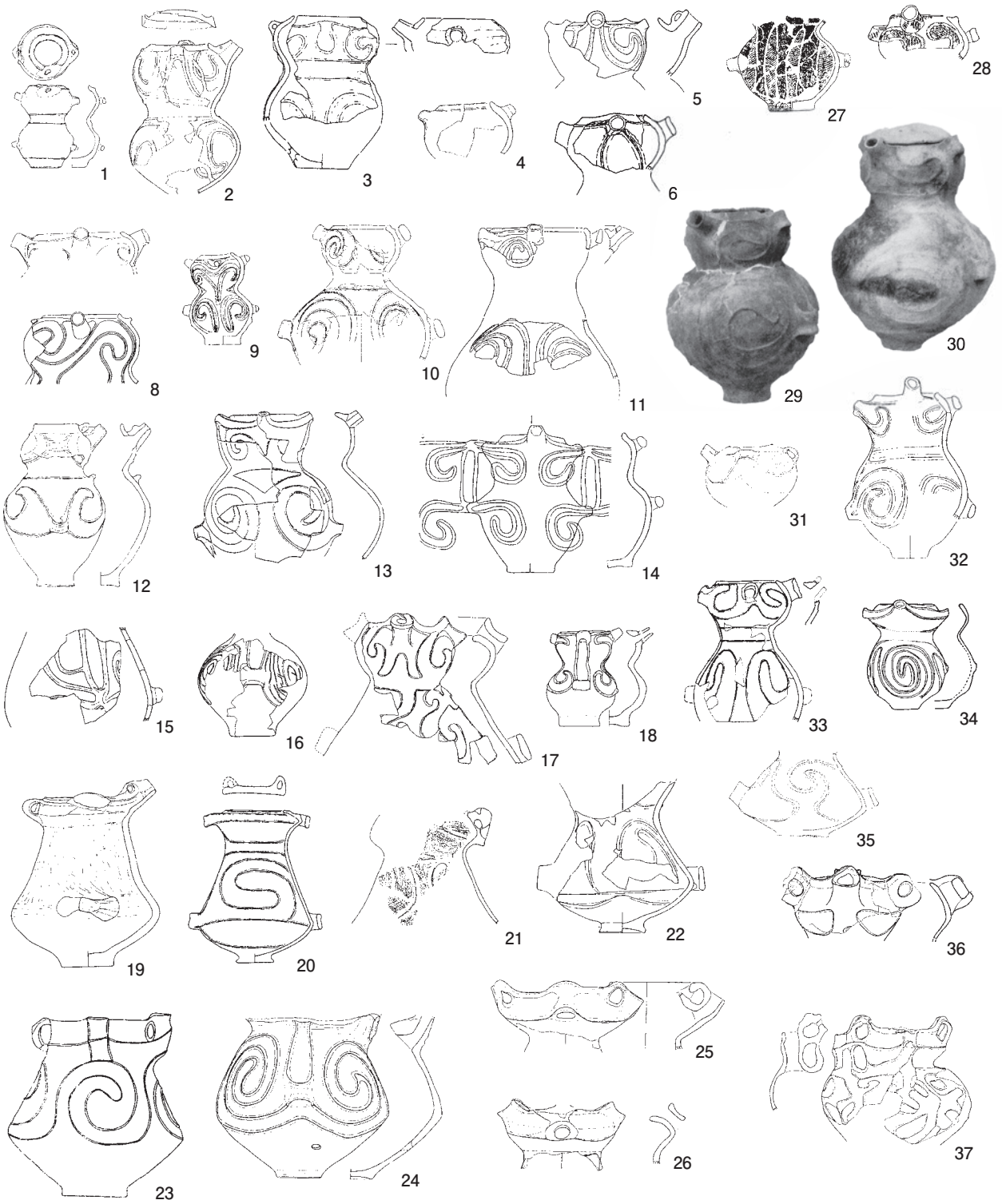
（６） 有孔鍔付注口土器と瓢箪形注口土器の関係

以上、有孔鍔付注口土器の周辺に位置付けられる各種の土器及び注口、横向き突起の系譜について見てきた。時系列に沿ってこれらの関係を見ると（第１表）、関東では加曽利Ｅ２式からＥ３式中段階まで有孔鍔付土器及び有溝小把手土器が安定して展開していたが、加曽利Ｅ３式新段階になると口縁が短くなるなどの形態変化を起こる。加曽利Ｅ３－４式期になると横向き突起付きを含む変化形が現れ、また、瓢箪形注口土器を代表として類縁の横向き突起と注口の付いた小壺や深鉢、注口付き深鉢が東北の影響から一斉に現れるのである。その兆候は加曽利Ｅ３式新段階にすでに認められ、瓢箪形有孔鍔付土器では飯積原山（８）16号住（第１図５）が、注口付き深鉢では上欠例（第７図６）がほぼ確実に当該期である。

ここにようやく標題の有孔鍔付注口土器と瓢箪形注口土器の関係を検討する環境が整った。

まず、本論の冒頭に挙げた有孔鍔付注口土器の五つの特徴のうち、①孔付きの鍔⑤微隆起線による渦巻紋様は有孔鍔付土器を踏襲した要素であることはすでに明らかであった。そして、②注口③横向き突起は東北起源であることが判明した。残るのは④キャリパー型深鉢にこれらが何故複合したのかという点と瓢箪形注口土器との関係である。

有孔鍔付注口土器のうち、深鉢形は江原台例以外にない点はすでに述べた。また、同じ深鉢形の新戸例は注口がなく、横向き突起が大型把手の上端のみに付



関東１槻沢59住（栃木）Ｅ３新？、２六崎貴船台31土（千葉）Ｅ３－４、３すすき山８住（千葉）Ｅ３－４、４宿前Ⅲ２住（埼玉）Ｅ３－４、５郷土1120土（長野）Ｅ３－４、６浅間東１土（埼玉）Ｅ３－４、７下佐野77土（群馬）Ｅ３－４、８富士見台Ⅲ（千葉）、９東恋ヶ窪５敷住（東京）Ｅ３－４、10寺野東539住Ｅ４中、11森ノ上32住（埼玉）、12さいたまＢ53（埼玉）、13多摩ニュータウン№３（東京）、14羽沢大道39土（神奈川）Ｅ４中、15多摩ニュータウン№671住（東京）Ｅ４古、16飯積原山（29）706住 Ｅ４中？、17水深西７住（埼玉）称１、18川又坂上５址（山梨）称１、19･20長田雉子ヶ原100住（千葉）称１古、21神々廻宮前17住（千葉）称、22宮内井戸作Ⅱ区78住（千葉）、23外野（茨城）、24野沢石塚103土（栃木）称２、25・26寺野東SX017（栃木）、**東北**27馬場前118住（福島）大木９新～９－10、28西方前９住（福島）大木９－10、29･30田村市（福島）、31高木（福島）、32和台20住 大木９－10～10、33北向（福島）、34上納豆内78住（福島）、35花畑１掘立（福島）、36下ノ内5住（宮城）門前、37高木　　29・30Ｓ≒1/8、その他Ｓ＝1/8

第８図　瓢箪形注口土器

第１表　関東北における各種祭祀用土器の動向

関東

	加曽利E2・2-3式期	加曽利E3式期（古）	加曽利E3式期（中）	加曽利E3式期（新）	加曽利E3-4式期	加曽利E4式期
有孔鍔付土器						?
有孔鍔付土器変化形			?			
有孔小把手土器					?	
注口土器	■					
横向き突起付土器（瓜実含）		■	■	■		
横向き突起＋注口				■		
有孔鍔付注口土器				■		
瓢箪形注口土器				■		

東北

	大木8ｂ・8-9式期	大木9式期（古）	大木9式期（中）	大木9式期（新）	大木9-10式期	大木10式期
注口土器						
横向き突起付土器						
瓜実形土器						
瓜実形注口土器						?

く異形の土器で、時期的には加曽利Ｅ３式新段階から３－４式段階の時期が与えられた。この時期、微隆起線紋様を持つ祭祀的色彩が強い一群の土器が一斉に現れ、併せて有紋の近縁種も現れる。その理由は有孔鍔付土器に形態変容が起こって祭祀用土器としての権威が低下し、新たな権威ある祭祀用土器を創出しようとする模索の結果であり、深鉢形態の採用もそうした様々な試みの一つであったと思われるのである。しかし、一般の深鉢と同一の陳腐な器形のため、結局のところ定着しなかったのであろう。

一方、瓢箪形の器形は類例の多さとその後も形態変容をとげつつ息長い継続性が認められることから、権威ある祭祀用土器として有孔鍔付土器に取って代わったのは明らかであろう。しかし、その形態は先学が解したように深鉢器形が変化したものとは思えない。江原台例（第１図１）に比べ、瓢箪形の飯積原山（８）16号住例（同図５）は加曽利Ｅ３式新段階で江原台例より古いと思われ、深鉢と瓢箪形の中間形態であるキサキ例（同図４）は加曽利Ｅ３－４式段階で江原台例より新しい可能性がある。したがって、瓢箪器形の採用は深鉢形有孔鍔付注口土器と同時期か、逆に先行する可能性もあるのである。かといって、今のところ瓢箪器形の祖形を求める先が見当らない。瓢箪形土器の最も古い形態はまさしく瓢箪形であって、上下とも球形で体部側が大きい、完成された姿で現れるものと思われる。今後の資料の追加を待たねばならないが、現状では瓢箪器形の出現は不明と言わざるをえない。ただ、ヒントとしては、第５図18～22などのような微隆起線紋様を持つ一群の土器に球形胴のものが多く見受けられる点である。この時期は再三述べているように関東において有孔鍔付土器に替わる新たな祭祀用土器を創出しようしている模索の時期である。福島の瓜実形注口土器から取り入れた注口と横向き突起、伝統的な無紋地の微隆起線紋様の２者を、球形胴を参考として新たに創出した瓢箪器形に合体させたのが、瓢箪形注口土器であると現状では考える以外にない。

以上、瓢箪形注口土器は有孔鍔付注口土器から変化したものではなく、ほぼ同時に出現したのは確かであろう。また、その出現には有孔鍔付土器の変化、東北からの強い影響あるいは受容、多様な近縁土器の誕生と相互影響といった複雑な状況が確認できた。そうすると、先学が指摘した有孔鍔付土器から後期注口土器へという単純進化論的な変遷は否定され、後期注口土器の出現もまた複雑であったことが予想され、なお詳細な検討が加えられるべきこととなろう。

４　まとめ

有孔鍔付注口土器を端緒として、結局中期終末期の関連土器を通観することとなった。伝統的形態の有孔鍔付土器に替わって瓢箪形注口土器をはじめとするこれらの多様な祭祀的土器が現れる加曽利Ｅ３式新段階から３－４式段階は、関東では丁度環状集落から分散型集落に転換した時期に当たっている。当然、社会組織も大きく変わったことが予想されよう。

有孔鍔付土器から模索段階を経て、瓢箪形注口土器が誕生するのは、そうした社会変化と連動して起こった事態なのであろう。

一方、東北では祭祀的な土器に大きな変化は見られ

ない。関東に近い福島を除き、注口土器は各種の器形に取り付けられる一方、横向き突起は瓜実形土器に限定して取り付けられて、両者は複合することなく安定的に展開していたことが追跡できるのである。この時期、東北では複式炉が確立し、集落の増加も認められている。転換期の関東とは対照的に隆盛期と考えられるのである。祭祀的土器の消長もまた社会を反映する鏡なのであろう。

本稿を草するに当たり、柳澤清一・芳賀英一・上守秀明・蜂屋孝之・長山明弘の各氏にご教示、ご協力を得た。また、神奈川県埋蔵文化財センター・福島県埋蔵文化財センター・福島市教育委員会・八王子市郷土資料館には資料実見に当たりお世話になった。末筆ながら、御礼申し上げる次第である。

注

1　鍔付有孔土器から後期注口土器を直接、間接に取り扱った論文、冊子はきわめて多い。文末に一覧を掲げたが、ここではその一々について検討を加える紙数がない。本論中で適宜触れるが、概ね藤森説（文献*1*）を肯定するものか、肉付け、発展させたものが多く、正面切って批判した論がない。その学史については各論文の冒頭に触れられているが、西山（文献*20*）の注１～注４で簡略にまとめられている。なお、藤森は当初命名した鍔付有孔土器の名称を、武藤の批判（文献*5*）を受けて有孔鍔付土器に変更した。しかし、田川（文献*6*）の指摘のとおり、孔の位置の違いから両者を区別することは有効と考える。

2　柳澤（文献*24*）・長山（文献*27*・*28*）ほか

3　丹野（文献*10*）では深鉢形と瓢箪形の２種に分類している。

4　山内清男は千鳥窪出土の堀之内１式の注口土器に付いた同種の突起を「横向の把手」とし、「体中央部の同形把手と共に紐を通し、或は懸垂するに適した装置である」としている（文献*3*）。なお、把手と突起の違いについては注９を参照されたい。

5　田川（文献*6*）では有孔鍔付土器（有溝小把手付土器）から有孔鍔付注口土器へ変化するとしながらも、深鉢に注口が付くのは「何らかの飛躍が存在する」と述べ、外的要因があるとしたが、どのような外的要因か具体的には示していない。また、丹野（文献*10*）では、「定型化した有孔鍔付土器が一定の形態から崩壊し、新たにそれの機能をもつ土器として再生した場合、煮沸・貯蔵用として用いられていた深鉢の器形を転用したもの」と説明したが、後述するように有孔鍔付土器は一定の形態から崩壊していない。上野（文献*21*）では、「深鉢になぜ注口をつけたのは（ママ）依然不明」と正直に吐露している。

6　宿東例（文献*110*）は深鉢形に器形復元されているが、もとより上半部はなく、深鉢形であった保証はない。

7　長沢（文献*7*）

8　西山（文献*11*）ではこれらを有孔鍔付土器第Ⅴ群としている。

9　突起と把手の違いについては、判断が難しい。把手とは名のごとくここを手に持って、土器を持ち上げる機能を有し、突起とはこうした機能を持たない単なる土器装飾と規定することができよう。しかし、実際には両者を個々の土器について判別するのはきわめて困難である。したがって、筆者は把手の呼称は安易に使用すべきではないと考える。加曽利Ｅ式後半の両耳壷に付く大型の橋状突起は把手と呼ぶべき数少ない例であろう。この意味では有溝小把手土器は呼称として相応しくないが、ここでは慣例に従う。

10　鈴木（文献*25*）

11　横向き突起は信州の中期中葉の鍔付有孔土器に付く例がわずかながらある。茅野市長峰遺跡、富士見町曽利遺跡、伊那市御殿場遺跡の各例がある（文献*7*・*132*）。長峰例は胴上部に対向して２個付き、曽利例は胴腹部に対向して２個付く。また、御殿場例は壷形をなし鍔下に対向して２個付く。中期中葉の鍔付有孔土器には橋状突起や眼鏡状突起が付き、横向き突起はこれらと同じ装飾的側面が強い。したがって、これらが東北の横向き突起に影響を与えたとは思えない。また、釣手土器にも横向き突起に近いものがある。蜂屋のいう第Ⅱ種にはアーチ状の橋に掛けられた複数の桁が付き、これが横向き突起とごく近い（蜂屋（宮城）文献*8*）。曽利Ⅱ式に現れるという。したがって、時期的には東北の横向き突起とほぼ同時となるが、分布は長野、岐阜を中心に西関東までに限られ、東北には及んでいない。また、第Ⅱ種より古い第Ⅲ種にも桁状のものが付く。地理的に離れるが、器体を吊るという点では共通しており、あるいはこれらが東北の横向き突起のヒントとなったのかもしれない。大木8b式の横向き突起の起源の解明は今後の課題である。

12　文献*48*。また、後述するさいたま市Ｂ-53号遺跡（第８図12）の瓢箪形注口土器は横向き突起下の底部側縁に打ち欠きを持ち、横向き突起が器体を吊り下げる紐掛けと考えられることが報告されている（文献*112*）。しかし、同じ横向き突起が付く月崎A55住例（第６図34）や高木例（第６図36）の瓜実形土器は、実見したところ底面に擦れが顕著に残り、床に置いて使用される状況もかなりの頻度であったのは確実である。

13　文献*86*では、当該土器を加曽利Ｅ３中１段階としたが、ここで訂正する。

14　鈴木（文献*25*）

15　阿部（文献*22*）では、横向き突起の祖形は大木８ｂ式から９式古段階に求められると指摘している。一方、瓜実形土器については、壺型土器の１種として同じ大木８ｂ式の有孔鍔付土器から派生する、としている。しかし、ここで見るとおり瓜実形の器形は大木８ｂ式の深鉢の１種から変化したとするのが妥当であろう。阿部のいう壺型土器１・２類と３類は、形態は一見すると似ているが、取り付けられる突起の違いから祖形は異なると考える。

16　阿部（文献*23*・*26*）

17　上野（文献*21*）

参考・引用文献

〈論文〉

1　藤森栄一・武藤雄六　1963「中期縄文土器の貯蔵形態について－鍔付有孔土器の意義－」『考古学手帳』20

2　渡辺　誠　1965「勝坂式土器と亀ヶ岡式土器の様式構造－東北地方の鍔付有孔土器を介して－」『信濃』17-2

3　山内清男　1967「日本先史土器図譜」（再版・合冊）

4　柿沼修平　1969「注口土器出現の前－有溝小把手土器考－」

『なわ』4
5　武藤雄六　1970「有孔鍔付土器の再検討」『信濃』22-7
6　田川　良　1980「鍔付形土器小考（Ⅰ）」『奈和』18
7　長沢宏昌　1980「有孔鍔付土器の研究」『長野県考古学会誌』35
8　蜂屋（宮城）孝之　1982「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学』Ⅱ
9　長沢宏昌　1984「有孔鍔付土器とその用途実験」『甲斐路』52
10　丹野雅人　1985「注口土器小考－縄文時代中期末葉における様相」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅲ
11　西山太郎　1986「有孔鍔付土器研究の現状と課題」『印旛郡市文化財センター研究紀要』1
12　西山太郎　1986「微隆起線文土器群の変遷と分布－加曽利ＥⅣ式期に認められる微隆起線文土器について－」『千葉県文化財センター研究紀要』10
13　金井安子　1987「有孔鍔付土器をめぐる地域間交流について」『青山考古』5
14　池谷信之　1990「綱取・堀之内型注口土器」『縄文時代』1
15　鈴木徳雄　1992「縄紋後期注口土器の成立－形態変化と文様帯の問題」『縄文時代』3
16　西田泰民　1992「縄文土瓶」『古代学研究所研究紀要』2
17　田村大器　1994「有孔鍔付土器の構造と機能について」『長野県考古学会誌』73
18　高橋雄三　1994「有孔（鍔付）土器の用途」『福島考古』35
19　長沢宏昌　1997「山梨県内出土の注口土器について」『山梨県史研究』5
20　西山太郎　2003「瓢箪型注口土器考」『印旛郡市文化財センター研究紀要』3
21　上野真由美　2004「瓢箪形注口土器の成立と展開」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』19
22　阿部昭典　2005「縄文時代中期末葉の壺形土器について」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅱ
23　阿部昭典　2006「注口土器成立以前の様相」『考古学ジャーナル』№550
24　柳澤清一2006「縄紋時代中・後期の編年学研究－列島における小細別編年網の構築をめざして－」『千葉大学考古学研究叢書』3
25　鈴木克彦　2007『注口土器の集成研究』雄山閣
26　阿部昭典　2008『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書⑥
27　長山明弘　2010「加曽利E（新）式における土器系列の研究(1)－「連弧文土器」から「Ｙ字文土器」へ－」『古代』124
28　長山明弘　2012「関東北に於ける土器系列の相関（１）－「懸華状連接区劃文土器」の分布と加曽利E3式土器の終末（上篇）」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念　考古学論攷Ⅰ－岡本東三先生退職とともに－』

〈発掘報告書等〉

29　青森県埋蔵文化財調査センター　1983『松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻ノ木遺跡』
30　青森県埋蔵文化財調査センター　1993『野場(5)遺跡発掘調査報告書』
31　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
32　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』
33　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『山王山遺跡第9次発掘調査報告書』
34　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2015『中野遺跡発掘調査報告書』
35　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2015『小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
36　盛岡市教育委員会　1986『大館遺跡群　大新町遺跡・大館町遺跡－昭和60年発掘調査概報－』
37　一戸町教育委員会　2006『御所野遺跡Ⅲ』
38　大迫町教育委員会　1986『観音堂遺跡－第1次～6次発掘調査報告書』
39　鹿角市教育委員会　1984『天戸森遺跡発掘調査報告書』
40　宮城県教育委員会　1988『大梁川遺跡・小梁川遺跡』
41　仙台市教育委員会　1987『山田上ノ台遺跡－昭和55年度発掘調査報告書－』
42　仙台市教育委員会　1990『下ノ内遺跡』
43　仙台市教育委員会　2010『上野遺跡　第6・7次発掘調査』
44　福島県教育委員会　1975『東北自動車道遺跡調査報告　八景腰巻遺跡（第１・２・４次）・田地ケ岡遺跡』
45　福島県教育委員会　1990『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅣ　上ノ台Ａ遺跡（第２次）』
46　福島県教育委員会　1990『東北横断自動車道遺跡調査報告７　北向遺跡』
47　福島県教育委員会　1990『矢吹地区遺跡調査報告６　桑名邸遺跡（第2次）』
48　福島県教育委員会　2003『常磐自動車道遺跡調査報告34　馬場前（２・３次）』
49　福島県教育委員会　2003『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告３　高木・北ノ脇遺跡』
50　福島市教育委員会　1993『宇輪台遺跡』
51　福島市教育委員会　1997『月崎Ａ遺跡（第６・16・18～26次調査）』
52　福島市教育委員会　2006『宮畑遺跡３（岡島）』
53　郡山市教育委員会　1982『河内下郷遺跡群Ⅱ　仁井町遺跡・上納豆内遺跡』
54　郡山市教育委員会　1995『郡山東部16　岩ケ作遺跡・妙音寺遺跡（第1次）』
55　郡山市教育委員会　1996『郡山東部19　妙音寺遺跡（第２次）』
56　田村市教育委員会　2006『前田遺跡』
57　山都町教育委員会　1983『上林遺跡』
58　三春町教育委員会　1989『西方前遺跡Ⅲ』
59　飯野町教育委員会　2003『和台遺跡』
60　会津坂下町教育委員会　2014『花畑遺跡』
61　いわき市教育委員会　1975『大畑貝塚調査報告』
62　いわき市教育委員会　1989『下平石遺跡』
63　いわき市教育委員会　2002『連郷遺跡』
64　栃木県文化振興事業団　1985『上欠遺跡』
65　栃木県文化振興事業団　1986『御城田遺跡（遺構・遺物実測図編）』
66　栃木県文化振興事業団　1996『槻沢遺跡Ⅲ』
67　栃木県文化振興事業団　1997『寺野東遺跡Ⅴ（縄紋時代環状盛土遺構・水場の遺構編－１）』
68　栃木県文化振興事業団　1999『寺野東遺跡Ⅱ』
69　とちぎ生涯学習文化財団　2001『寺野東遺跡Ⅲ（縄紋時代住居跡編－１）』

70　とちぎ生涯学習文化財団　2003『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』
71　とちぎ生涯学習文化財団　2008『小鍋前遺跡』
72　茨城県教育財団　1982『常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４　宮部遺跡・鹿の子Ａ遺跡・砂川遺跡』
73　茨城県教育財団　1984『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10　南三島遺跡１・２区（下）』
74　茨城県教育財団　1985『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11　南三島遺跡６・７区（上）』
75　茨城県教育財団　1985『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3　大谷津Ａ遺跡（上）』
76　茨城県教育財団　1987『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16　南三島遺跡３・４区（Ⅰ）』
77　茨城県立歴史館　2006「茨城の縄文土器」『茨城県立歴史館史料叢書』9
78　勝田市教育委員会　1983『昭和57年度　三反田蜆塚貝塚発掘調査報告書』
79　千葉県文化財センター　1986『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－大栄地区(1)－』
80　千葉県文化財センター　1992『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区4）』
81　千葉県文化財センター　1998『千葉東南部ニュータウン19』
82　千葉県文化財センター　1998『市原市武士遺跡2』
83　千葉県文化財センター　2001『船橋市新山東遺跡』
84　千葉県教育振興財団　2014『酒々井町飯積原山遺跡2』
85　千葉県教育振興財団　2015『酒々井町飯積上台遺跡２・飯積原山遺跡３・柳沢牧墨木戸境野馬土手』
86　千葉県教育振興財団　2015『酒々井町飯積原山遺跡４』
87　印旛郡市文化財センター　1988『神々廻遺跡群』
88　印旛郡市文化財センター　1989『長田雉子ケ原遺跡・長田香花田遺跡』
89　印旛郡市文化財センター　1995『墨木戸』
90　印旛郡市文化財センター　2002『六崎貴舟台遺跡（第10次）』
91　印旛郡市文化財センター　2009『宮内井戸作遺跡（縄文時代遺物図版編）』
92　香取郡市文化財センター　1995『キサキ遺跡』
93　後藤和民・庄司克　1972「千葉市源町すすき山遺跡発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』５
94　市川市教育委員会　1969『今島田遺跡』
95　松戸市教育委員会　1978『子和清水貝塚　遺物図版編１』
96　流山市遺跡調査会　1983『富士見台第Ⅱ遺跡』
97　江原台第１遺跡発掘調査団　1979『江原台』
98　成田市教育委員会　1990『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－遺物編－』
99　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986『下佐野遺跡　Ⅱ区⑴縄文時代・古墳時代編』
100　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』
101　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010『中郷遺跡⑵－旧石器・縄文時代編　第２分冊　土器編』
102　群馬県企業局　1992『三原田遺跡』第３巻
103　渋川市教育委員会　1978『空沢遺跡』
104　長野原町教育委員会　2000『坪井遺跡Ⅱ』
105　埼玉県遺跡調査会　1972『加倉・西原・馬込・平林寺』
106　埼玉県遺跡調査会　1976『志久遺跡』
107　埼玉県教育委員会　1984『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書－人工遺物・総括編－』
108　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986『将監塚－縄文時代－』
109　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989『古井戸－縄文時代－』
110　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998『宿東遺跡』
111　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2013『高木道下（Ｃ-99号）／高木道下北』
112　大宮市遺跡調査会　1995『Ｂ－53号遺跡・Ｃ－64号遺跡』
113　さいたま市遺跡調査会　2002『水深北遺跡（第６次調査）・水深西遺跡（第3次調査・水深遺跡（第６・７次調査）』
114　上尾市遺跡調査会　1995『宿前Ⅲ遺跡』
115　狭山市遺跡調査会　2005『森ノ上遺跡』
116　合角ダム水没地域総合調査会　1995『秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』
117　東京都埋蔵文化財センター　1982『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度－（第5分冊）』№３遺跡
118　東京都埋蔵文化財センター　1995『多摩ニュータウン遺跡－№67遺跡－』
119　町田市教育委員会　1972『鶴川遺跡群』
120　国際基督教大学考古学研究センター　1976『前原遺跡』
121　国分寺市遺跡調査会　1990『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅰ』
122　都立府中病院内遺跡調査会　1996『武蔵国分寺跡西方地区　武蔵台遺跡Ⅲ』
123　目黒区大橋遺跡調査会　1998『大橋遺跡　上巻』
124　八王子市南部地区遺跡調査会　1998『南八王子地区遺跡調査報告12』小比企向原
125　忠生遺跡調査会　2010『忠生遺跡　Ａ地区（Ⅱ）－Ａ１地点　縄文時代遺物編（１）－』
126　神奈川県教育委員会　1977『尾崎遺跡』
127　神奈川県立埋蔵文化財センター　1988『新戸遺跡』
128　県営羽沢団地内遺跡発掘調査団　1993『羽沢大道遺跡発掘調査報告書』
129　米軍キャンプ座間地内遺跡発掘調査団　2000『米軍キャンプ座間地内遺跡　発掘調査報告書』
130　新潟県埋蔵文化財調査事業団　2013『町上遺跡』
131　田中耕作　1988「加治川村貝屋Ａ遺跡の中期注口付き土器」『北越考古学』1
132　長野県　1983『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中・南信）』
133　長野県埋蔵文化財センター　2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』郷土
134　長野県埋蔵文化財センター　2013『中野市千田遺跡』
135　綿田弘実　2003「小県郡真田町唐沢岩陰遺跡の出土遺物」『長野県立歴史館研究紀要』９
136　岡谷市教育委員会　1996『花上寺遺跡』
137　山梨県埋蔵文化財センター　1993『川又坂上遺跡』
138　中伊豆町教育委員会　1979『上白岩遺跡発掘調査報告書』
139　福島県立博物館　2012『福島県立博物館資料百選』

挿図出典　（凡例　挿図番号１：文献番号*97*）

第１図

１・３：*97*、２：*127*、４：*92*、５：*84*、６：*80*、７：*122*、８：*21*

第２図

１：*105*、２：*125*、３：*119*、４：*95*、５：*101*、６：*108*、７：*81*、８：*104*、９：*106*、10：*66*、11：*82*、12・13：*74*、14：*83*、15：*128*、16・20・21：*51*、17・24：*63*、18：*44*、19：*71*、22・23：*61*、25・28：*59*、26：*47*、27：*53*、29：*49*、30：

129、31：*92*、32・33：*73*、34：*64*、35：*107*、36：*103*、37：*75*

第３図
１：*136*、２：*109*、３：*66*、４：*108*、５：*133*、６：*124*、７：*94*、８：*63*、９：*123*、10：*134*、11：*111*、12：*75*、13：*100*、14：*82*、15：*85*、16：*102*、17：*49*、18：*38*、19：*51*
第４図
１：*54*、２：*55*、３：*25*、４：*44*、５：*59*、６：*34*、７・８・14～16：*44*、９～11：*40*、12・13：*25*、17：*43*、18：*39*、19：*131*、20：*100*、21：*75*、22：*69*、23：*126*、24：*103*、25：*116*、26：*66*
第５図
１：*25*、２：*31*、３：*33*、４・９：*30*、５：*51*、６：*47*、７：*52*、８：*59*、10：*48*、11：*73*、12：*64*、13：*76*、14・16・17：*69*、15・27：*86*、18：*89*、19：*109*、20：*107*、21・24：*68*、22：*78*、23：*135*、25・26：*128*、28：*99*、29：*72*
第６図
１：*36*、２：*33*、３：*34*、４：*43*、５：*35*、６・７：*40*、８・９・36：*49*、10：*37*、11：*31*、12：*29*、13・30・31・37：*59*、14・18：*39*、15：*32*、16：*22*、17：*45*、19・20：*41*、21：*86*、22：*84*、23・28：*66*、24：*138*、25：*82*、26：*83*、27：*79*、29：*130*、32：*48*、33：*56*、34：*51*、35：*50*
第７図
１：*57*、２：*58*、３：*62*、４：*59*、５：*76*、６：*64*、７：*78*、８：*98*、９：*120*、10：*10*、11：*65*
第８図
１：*66*、２：*90*、３：*93*、４：*114*、５：*133*、６：*21*、７：*99*、８：*96*、９：*121*、10：*69*、11：*115*、12：*112*、13：*117*、14：*128*、15：*118*、16：*84*、17：*113*、18：*137*、19・20：*88*、21：*87*、22：*91*、23：*77*、24：*70*、25・26：*67*、27：*48*、28：*58*、29・30：*139*、31・37：*49*、32：*59*、33：*46*、34：*53*、35：*60*、36：*42*